



お姉ちゃん
おおきに

山田洋次監督作品

吉永小百合

笑福亭鶴瓶



家族という厄介な、でも切っても切れない絆の物語

監督 山田洋次

吉永小百合

笑福亭鶴瓶

蒼井優

加瀬亮

小林稔侍 森本レオ 茅島成美 田中壮太郎 キムラ緑子 笹野高史 ラサール石井 佐藤蛾次郎 池乃めだか 小日向文世 横山あきお 近藤公園 石田ゆり子 加藤治子

プロデューサー：深澤宏・山本一郎・田村健一 脚本：山田洋次・平松恵美子 撮影：近森真史 美術：出川三男 音楽：富田勲 照明：渡邊孝一 編集：石井巖 録音：岸田和美 製作：「おとうと」製作委員会（松竹、住友商事、テレビ朝日、博報堂DYメディアパートナーズ、衛星劇場、デンジャーシステムズ、日販、TOKYO FM、Yahoo! JAPAN、読売新聞、朝日放送、名古屋テレビ放送、木下工務店） 制作・配給：松竹株式会社

www.ototo-movie.jp



おとうと

現代を生きる「家族」に
寄り添いながら、
その希望を描く感動作。

家族の絆とは、人生とは、
別れとは何かを切々と問いかける、
笑いと涙の物語。

家族という厄介な絆

山田洋次

骨肉の争いという言葉があるが、
肉親同士が時として他人以上に
憎しみ合ったりするのは、
誰にでも思いあたることだろう。

映画やテレビのホームドラマは
家族があのようにありたいという
観客のあこがれを描くのだろう。

ぼくには、タイトルもそのものずばりの
「家族」という作品があるし、
「寅さんシリーズ」四十八作を通して
描きたかったのは、
寅さんをめぐる家族の絆、
その苦しみと喜びについてだった。

さて、寅さんシリーズが、
愚かな兄と賢い妹の滑稽譚だったとすれば、
今度の『おとうと』は、賢い姉と愚かな弟の、
可笑しくて哀しい物語である。

一九六〇年に市川崑監督によって製作された
名作『おとうと』と、あえて同じタイトルをつけ、
この作品を敬愛する市川崑さんに捧げたい。

二〇〇九年四月二八日



山田洋次監督10年ぶりの現代劇の集大成。最新作『おとうと』が遂に完成。

『家族』、『幸福の黄色いハンカチ』、『息子』、『学校』シリーズ、そして『男はつらいよ』シリーズで、日本の家族を描き続けてきた山田洋次監督。本作は、東京で堅実に生きてきた姉と、大阪で何かと問題ばかりを起こしてきた弟との、再会と別れを優しく切々と謳いあげる、笑いと涙にあふれた物語です。

東京の郊外で、夫亡きあと小さな薬局を営み、一人娘の小春を育ててきた姉・吟子。大阪で何ひとつ成し遂げないまま歳を重ねてしまった弟・鉄郎。音信不通だった彼が突然、小春の結婚式に現れ、酔っぱらって大騒ぎ、披露宴を台無しにしてしまう。激怒する身内の中、鉄郎をかばうのは吟子だけだったが、ある出来事がきっかけで、吟子は絶縁を言い渡してしまう。肩を落として出ていく鉄郎の背中に不吉な予感を覚える吟子だったが…。

姉の吟子に扮するのは、吉永小百合。冗談ばかりの弟と真面目な姉の、微妙にかみ合わないおかしさを軽やかに演じると同時に、賢い姉であり母である吟子の家族への愛情を全身からにじませ、スク

リーンに優しさと温かみを添えています。愚かな弟の鉄郎には、『私は貝になりたい』『ディア・ドクター』の笑福亭鶴瓶。何かと問題ばかり起こしてはいるが愛すべき存在である彼の姿に、『男はつらいよ』の「寅さん」が重なります。

吟子の娘、小春には、今や日本映画界になくはならない若手女優となった『フラガール』『百万円と苦虫女』の蒼井優。小春の幼なじみで大工の亭には、『それでもボクはやってない』『硫黄島からの手紙』の加瀬亮。

また、鉄郎さえ絶句させる吟子の義母に加藤治子、厳格な兄に小林稔侍が扮し、小日向文世、石田ゆり子、笹野高史、森本レオ、キムラ緑子、近藤公園など、錚々たる顔ぶれが出演しています。

戦後の昭和に生まれ育った姉と弟の切りようにも切れない絆を、バブル景気の直前に生まれた娘の眼を通して描く本作で、私たちがスクリーンに見るのは、現在とこれからの日本の家族の姿です。

映画盗撮は犯罪!
発見したら
www.eigakan.org
0120-550098

2010年1月30日(土)ロードショー

特製『おとうと』一筆箋付 前売鑑賞券発売中! 一般1,300円(税込)

※1枚につき1個。※なくなり次第終了します。※一部劇場を除く。※前売特典は劇場窓口限定となります。

